

短歌

令和六年度  
阿南市春季短歌誌上大会 選

入選

冬を越しもみじ葉ひとつ付けしまま神楽鈴ごと  
「まゆみ」が揺るる

棚野 久子

春雷の轟き有りて降りだした雨は北斎描くがごとし

水口 明美

白粥の湯気が日差しに泳ぐ朝二人まつたりまつたり二人

粟田 佐知

日溜りに充電をすることくみて白梅の香に癒されてをり

西崎まき子

瓦礫残る更地に花群れそこかしこ元は水仙屋敷だったらし

島尾 妙

人の世に悲喜こもごもはあろうとも黙し桜は満ちて散るなり

郡 雅和

から揚げを揚げる元気は君のため今日も弁当幸せが行く

定本 直子

とぼとぼと我が家を目指し土手の道潜水橋は今も替わらず

川口 節子

歌友と話は満ちて開ける窓秋の色香は一直線に

谷一 民子

コロナには縁なき我と思いに終息ま近に感染したり

宮本久美子

古民家の表座敷に雛立てて婚遅き娘の倅せ祈る

山野 賢治

「老化なら病気での方が良かったやん」「まあホウ言えばホヤけんどナア」

佐坂 恵子

はあい、ハイ背中押されて飛びこめり大縄跳の輪のトンネルへ

亀島賀陽子

俳句

阿南市俳句連合会 選

新涼や待つて買ひたる二番底

陶久 晴義

大台風悲鳴あげつつ木々もだえ

米田 豊子

香り来て見上ぐる頭上葛の花

小西 晴美

稲架掛けの茎に残れる薄緑

中富はるか

新米の出荷愉しむ八十路まだ

表原 清美

気配して急ぎ外に出で夜半の月

石井 政子

行き交す人影恋し秋の蝶

久米 千草

野良着より飛蝗飛び出す脱衣籠

繁木 良子

あの頃は笑い声あり葛の家

廣浦 保子

この話幾度も聞くと敬老日

浜田百合子

川柳

阿南川柳会 選

仲直り好物並べ様子見る

近藤 大地

マドンナの今を聞けないクラス会

鈴木レイ子

だんじりを引く人今はシルバーに

篠原 良子

百寿まで呼ぶな急かすなまだ逝けぬ

西田 修身

隠し事様子で見抜く妻となる

若木アヤ子

在所では過ぎた嫁だという噂

渡邉ろまん

イケメンが意外にもてずシングルで

多田紀久代

一般応募

ハッカ飴舌で転がし過去を消す

島尾美津子

明日からと詫びる言葉に騙される

泰地 重美

喋れないマル秘いっぱい持った舌

武田 敏子

漢詩

阿南漢詩研究会・青松吟社 選

送秋詩

山川 治

秋雨瀟瀟木葉紛

秋雨瀟瀟 木葉紛たり

那堪祭囃隔窗聞

那んぞ堪えんや祭囃の窓を隔てて聞くに

病牀少婦聲愁殺

病牀の少婦 声愁殺す

惟見杯池點水紋

惟だ見る 杯池 水紋の点ずるを

秋夜裁詩

荒瀬左知子

院落月明蟲語寒

院落月明 虫語寒し

窗前詩興夜闌干

窓前の詩興 夜闌干

不才文事句難就

不才の文事 句就り難く

蟾兔尋來照老殘

蟾兔尋ね來たりて 老残を照らす

冬至

池田 行子

家家院落月如霜

家家の院落 月霜の如く

黃柚浮湯浴室香

黃柚湯に浮かんで 浴室香る

酣宴歡談又閑話

酣宴歡談 又 閑話

此時可樂夜偏長

此の時樂しむ可し 夜の偏に長きを

